

2017年8月20日 礼拝メッセージ

聖書：使徒の働き 8章 1～8章

説教：迫害にあってもなお

はじめに

今日からまた使徒の働きに戻ります。7章までのあらすじを簡単に振り返ります。イエスが死からよみがえられ、弟子たちにその姿を現してくださいったとき、「あなたがたは、エルサレムに留まり、聖霊のバプテスマを受けるまで待ちなさい」と語ります。弟子たちは、その命令に従いながら一つ所に集まっていると、ある日、突然激しい風が吹くような大きな音がして、聖霊が降り、それまで語ったこともない外国語で語り始めました。何事が起こったのかと驚いて集まってきた人々に、ペテロは、「あなたがたは神の人であるイエスを十字架につけて殺したのだ」と責め、これを聞いて心を刺された人々は、この日、悔い改めて救われていきました。

このことをきっかけにしてエルサレムに初めて教会が建てられていきます。次第に教会には多くの人が集まるようになります。それまで十二人の使徒たちが、教会の全部を見ていたのですが、どうしても手が回らない。一部の人たちから苦情が出てしまいます。そこで組織の運営方法を見直すことになり、信仰と聖霊に満ちた何人かを選んで仕事を分担することになりました。その中のひとりがステパノでした。彼は主に外国から移住してきたユダヤ人の家を回り、伝道をするようになります。ところが、ユダヤ教を信じている人たちから激しい攻撃を受け、律法に逆らうことを宣べ伝えているという罪状で大祭司の前に訴えられてしまいます。ステパノはこれにひるむことなく、裁判の席で証言します。

旧約聖書にはイエス・キリストのことが預言されていること、その神の子を殺したのだと きっぱりと述べます。これを聞いた人々は、怒りに燃えてステパノに石を投げ、打ち殺してしまいました。それが7章までのあらすじです。

1 サウロ (のちのパウロ)

1) ステパノ殉教のとき

1節に「サウロは、ステパノを殺すことに賛成していた」とあります。このサウロこそ、のちにパウロと呼ばれ、新約聖書の中で多くの手紙を残したキリスト教の伝道者のことです。彼は、もともと外国で生まれ育ち、若いときにエルサレムに留学し熱心に律法を学びユダヤ教のパリサイ派に属して、将来パリサイ派の幹部になるだろうと目されていました。そんなあるとき、ステパノという男が、当時の新興宗教であるキリスト教を宣べ伝え、ユダヤ教の人たちから改宗する者が大ぜい出ていると知り、危機感を持ちます。こんな危険な宗教は徹底的にたたきつぶすべきであると考え、ステパノの裁判にかけつけました。ステパノの処刑ときにも、サウロはすぐそばにいて、処刑人たちが石を投げるために脱いだ服をあずかって番をしていたと書いています。

2) 教会を迫害する

のちにキリスト教の最も熱心な伝道者になった人が、実は若いとき、そのキリスト教をもっとも迫害する側にいた。たまたまいた

のではなく、ステパノを殺すことに積極的に賛成し、処刑の協力していた。これは隠しておきたい経歴です。ふつうなら墨で黒く塗りつぶすか、なかったことにするでしょう。しかし聖書は隠しません。3節に「サウロは教会を荒らし、家々に入って、男も女も引きずり出し、次々と牢に入れた」とさえ書きます。後にサウロが回心してキリスト者になったとき、教会の人たちは恐ろしくて、彼を自分たちの仲間に加えることを非常に躊躇したと言われています。それほどひどいことをしたわけです。それがどのようなものであったかは、1節の後半にあるとおりです。「その日、エルサレムの教会に対する激しい迫害が起こり、使徒たち以外の者はみな、ユダヤとサマリヤの諸地方に散らされた。」

今の時代も、いろいろな理由によって迫害されたり、差別されたりする人々が絶えません。亡命を強いられたり、難民となって外国に移住しなければならぬ人たちが沢山います。それは今の時代に限ったことではなく、すでに聖書の時代からこういうことが起きていたのです。

神が建ててくださった教会のはずです。教会が苦しんでいるとき、なぜ神は黙っているのでしょうか。神が生きておられるのであれば、ステパノが殺されないようにするべきではないのか。クリスチャンが迫害に遭わないようにするべきではないのか。しかし、キリストを信じる者への迫害は止みません。キリストのために殉教する者が出て来ます。いったい神はなにをされているのか。このことはまた後で考えたいと思います。

2 サマリヤ

1) イエス (ヨハネ4章9節)

エルサレムを脱出した人々が向かったのは、ユダヤとサマリヤの諸地方でした。ユダヤというのは、エルサレムから見て主に南の地域を指し、サマリヤは北の地域を指します。なぜわざわざユダヤとサマリヤと書くのか。そこには一つの歴史的な事情が背景にあります。そのことがよく現されている箇所がヨハネ4章です。イエスがサマリヤ地方を通られたときのことです。その日は非常に暑い日でしたから、旅の疲れもあって井戸の傍らに腰をおろされます。そこへ、ひとりの女性が水を汲みに来たのを見て、イエスは声をかけます。「わたしに水を飲ませてください。」女はこう答えます。「あなたはユダヤ人なのに、どうしてサマリヤの女の私に、飲み水をお求めになるのですか。」なぜこの女性がこう答えたのか、その理由も書かれています。「ユダヤ人はサマリヤ人とつきあいをしなかったからである。」

同じイスラエル民族であるのに、ユダヤ人とサマリヤ人が犬猿の仲になってしまった原因は、あのソロモンの時代にまでさかのぼります。ソロモンは外国から多くの女性を妻として迎えたのですが、それとっしょにいろいろな宗教を持ち込まれてしまいます。ソロモンはこの影響を強く受けてしまい、じょじょにイスラエルの神を忘れ、外国の宗教に傾いていく。これを見た神はソロモンに対し、このまま改めないならばイスラエルを引き裂くと警告するのですが、残念ながらソロモンは改めない。結局、彼の死後、サマリヤを首都とする北王国と、エルサレムを首都とするユダに分裂してしまい、それ以来ユダヤ人とサマリヤ人は仲が悪いままになっていました。それからおよそ五百年経って、イエスはサマリヤに向かわれそこで一人の女を

救っていった。それがヨハネの福音書に書かれていたことでした。

2) ピリポ

今、エルサレムから逃れた人々は、そのサマリヤの地に向かい、不思議なことですが、そこでみことばを宣べ伝えるようになります。このとき、中心的な働きをしたのがピリポという人であったようです。ピリポとは何者であるのか。実は、教会が急激に大きくなり、組織の立て直しを迫られたとき、ステパノといっしょに特別に選ばれた人の一人でした。そんなピリポでさえエルサレムに留まることができなかつた。それほど迫害が激しかったことを物語ります

3 試練のとき

1) 神はなぜ迫害を止めないのか

イエスは天に上げられるとき、「大きな力を着せられるまで、エルサレムに留まりなさい」と言われました。確かにその一週間後に天から聖霊が降り、そのことをきっかけにして最初の教会が建てられていきます。教会を建ててくださったのは主です。その教会が迫害に苦しんでいます。ならば主は教会を助けるべきではないのか。でも何もしないように見える。後のことには関心がないのか。もちろんそんなはずはない。

ステパノが石で打ち殺されるとき、彼はこう叫びました。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」ステパノによれば、神はご覧になっているのは確かなようです。しかし、ステパノが殺される時、神は何もしません。なぜでしょう。

これは私たちにも関わる大きな問題です。

主は救い主。主は苦しいときの避け所。聖書に書いてあるとおりに信じています。でもどうでしょうか。私たちが苦しんでいるときに神は助けてくれるのか。本当に避け所となってくれるのか。不安になります。

「祈ったらかなえられました。」そのようなことが起きます。奇蹟のようなことさえ起きます。そんなとき神が私たちに助けてくださると確信できます。

しかしいつもそうだとはいりません。どんなに祈っても、祈りが聞き届けられない。神は私を見捨てたのではないか、そんなときもあります。祈りが応えられないのは、祈りが足りないからなのか。それとも、私たちに何か落ち度があつて、そのために神は怒っておられるのでしょうか。でも、使徒たちはどうであつたのか。彼らは祈っていなかつたのか。熱心に祈っていました。ステパノは神の怒りを受けたのか。いいえ。信仰と聖霊に満ちたすばらしい信仰者でした。それでも殉教しました。これはどういうことか。

2) 苦しみ喜びに

神がときには沈黙されるのはなぜか。そのことを考えます。

私たちは、当たり前のことですが、苦しみは悪いことという大前提でものごとを考えています。ですから、エルサレムの人たちが迫害にあうのを見て、それは悪いことと考える。確かに間違いではない。しかしそれだけか。その結果何が起きたでしょうか。サマリヤの町に大きな喜びが起きました。人々がエルサレムから地方に散らされたことによつて、サマリヤの人々が救われていきました。これこそ、神のご計画だと言えないでしょうか。もしそうであるなら神の沈黙にも意味が

あることとなります。

3) 神が沈黙される時

私たちが罪から救うために、十字架におかかりになりました。そこで主はなんと叫びましたか。マタイ 27 章 46 節です。「わが神、わが神。どうして、私をお見捨てになったのですか。」

私たちは、苦しみの中に置かれると、神に見捨てられた。神は応えてくださらない、と嘆くことがあります。しかし、私たちの主はどうだったのか。この方こそ、十字架の上で父なる神に見捨てられるというつらい経験をされたのではないか。なぜ見捨てられるたのか。見捨てられることが、私たちの救いになるからです。主の苦しみは、私たちの救いと喜びのためであった。

苦しみの中に残り残されたように感じる時、主の助けを必死に待ちます。しかし主からの確かな手ごたえを感じることができず、苦しむことがあります。神は私を見捨てたのかと、疑いたくなる時があります。

神は私たちを見捨てることは絶対にありません。なぜそんなことが言えるのか。この方が、神に見捨てられた経験を持っているからです。神に見捨てられることがどんなにつらいことがよくご存じです。だから絶対に見捨てない。神の助けは見えなくても、必ず神のご計画があつて、しばらく苦しみの中に置かれることがある。私たちの苦しみは決して無駄にはならない。それは、だれかの喜びのために用いられていく。だれかの救いのために必要とされる苦しみなのかも知れない。そのために、いつきの苦しみが続くことがあります。神は聖霊を与えて、信仰がなくならないようにと励まし続けます。

そのような神のご計画のなかで生かされている私たちであることを、もう一度思い起こしたいと願います。